

1. 南米出土化石について
2. アジア出土化石について
3. 南・北アメリカ大陸とヨーロッパ大陸出土の第三紀食虫類化石の対比

総 説

- 1) 江原昭善 (1978) : サルからヒトへの論理。
アニマ No.67, 平凡社
- 2) 江原昭善 (1978) : 人類の起源を求めて。
創造の世界, 第28号, 小学館
- 3) 江原昭善 (1979) : 人類の進化とその探求の
意義。メジカル・ビュー Vol.14, No.2
- 4) 江原昭善 (1978) : 自然人類学。— 科学的に
なった人類起源論・系統論。1978年百科年鑑。
平凡社。
- 5) 江原昭善 (1979) : 自然人類学。第10回国際
人類学民族学会議 — 人類学に内在する自己
矛盾— 第7回国際霊長類学会 1979年百科
年鑑。平凡社。
- 6) 江原昭善 (1979) : アフリカ大陸におけるサル
類の系統発生。アフリカ研究 Vol.18
- 7) 江原昭善 (1979) : 猿人類の起源と系統をめ
ぐって。科学 Vol.49 No.11 岩波書店

そ の 他

- 1) Amsir Bakar 1979 :
Morphological Study of
Mandibles of Primates
Living on Siberut Island,
Indonesia
- 2) M. Aimi, 1979 : A Revised
Classification of the
Japanese Red-backed Voles.
学位論文
- 3) M. Aimi & Sudijono, 1979 :
On the problematical
species *Aceratherium boschi*
von Koenigswald, 1933. *Bull.*
Geol. Research Development
Centre, 1 : 37-45.

報告その他

江原昭善・木下 実 (1979) : 愛知県知多郡東浦町
緒川城跡出土人骨について。東浦町教育委員会

江原昭善・木下 実 (1979) : 尊星王院跡出土人
骨鑑定結果。郡上郡大和村史編集委員会
A. Ehara 1979 : On the
morphological features of the
nasal bones of *Simias concolor*.
昭和51～53年度文部省科研費補助による海外
学術調査報告書
*A Comparative Sociological
Study on Coloboid Monkeys in
Tropical Asia in 1976-1978*

幸島野外観察施設

岩本光雄 (施設長・兼)・森 明雄

幸島地域をめぐる観光開発や観光客の増大にと
もなっており、観察フィールドとしてのみならず、全
島天然記念物としての幸島の維持には、多くの困
難さが持続している。基本的には、国のレベルに
よる管理体制の検討なしには解決しえない問題で
あろう。

53年2月以来、幸島と本土の間に砂が堆積し、
干潮時には広く陸続きになる現象が起こった。こ
のため観光客が自由に渡島でき、またサルの方が
観光客の餌にひかれて本土に渡る可能性が生じ、
そのあたりの管理に大きな努力を注ぐ必要があっ
た。夏になって陸と島が離れたが、54年2月に再
び島が陸続きになり始めた。

<群れの状況>

幸島に生息するニホンザルは、54年8月現在で
95頭である。51年以来目立つようになった夏に群
れのまとまりが悪くなる現象は、観光客その他の
人による影響と考えられる。それを防止するため
と、ここ数年、子ザルの成長の遅延と出産率の低
下が目立っているためその回復をはかるためとの
2つの目的で、52年7月10日～9月5日に、毎朝
群れに大豆を給餌したが、53年度も7月5日～7
月27日、および7月31日～8月31日の期間、毎朝
大豆を給餌した。

前年の給餌の効果が現われ、53年度は13頭のア
カンボウの出産があった。内訳は前年出産しなかつ
た経産メス7頭のうち6頭が出産し、ここ数年
発育の遅れていたメスが一せいに初産(7頭)を
行なった。しかし、2年連続出産は見られなかつ

た。53年度に見られた死亡個体は、最年長のメスがアカンボウと共に死亡した以外はなかった。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

森 明雄・三戸サツエ

冠地富士男・山口直嗣

前年度からの継続で、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集している。毎月1回は全個体の体重測定を行っている。社会学的研究については、通年の変化や、個々のトピックについて調べている。

2) ニホンザルの行動のエソロジカルな研究

森 明雄・三戸サツエ

冠地富士男・山口直嗣

霊長類研究所のオープンエンクロージャーにおいて、行動の連鎖を解明するための記録を行なった。

3) 内部寄生虫に関する研究

薄井萬平・柳田孝司(宮崎大)

森 明雄

内部寄生虫卵の季節変化を、毎月1回、個体毎に採糞することにより、定量的に調べた。

なお53年度に本施設を利用した共同利用研究者は早木仁成(京大)、町田昌昭(国立科学博物館)、薄井萬平(宮崎大)である。その他、長期滞在し、利用した研究者は、鈴木延夫(北大)、星野次郎(京大)、久保田英史(京大)等である。本年度に、本施設を訪問あるいは利用した研究者は、延べ484人であった。

また、昨年度にひきつづき、本年度も大学院学生による実習として、幸島でのフィールド・ワークが行われた(53年7月2日~7日)。

学会発表

ニホンザル幸島群における、体重変化から見たポピュレーション動態

森 明雄

第26回日本生態学会大会(1979)

サル類保健飼育管理施設

千葉敏郎・松林清明
後藤俊二・松林伸子¹⁾

先ず特筆すべきことは、昭和54年度概算要求において繁殖コロニー設置が認められたことである。繁殖コロニー設置によって、研究用サル類の自家繁殖体制を整備すべきことの重要性については最早ここに改めて述べる必要はあるまい。当初の要求は屋外グループケージ8棟および育成舎1棟の建設であったが、その後京大本部との折衝によって放飼場1および育成舎1棟を設けることとし、協議員会によって承認された。これは繁殖コロニー設置を文教施設整備として扱い、そのためには小規模の建物を分散して設けるよりも、大規模なものに集約する方が要求実現の度が高いこと、また実際の維持管理のことを考えれば、いきおい人手のかからない放飼場形式を採らざるを得ないこと、などの理由に基づくものである。しかし8,000 m²近い放飼場を本研究所のキャンパス内に設けることになれば、所内全体の環境・将来計画、附近住民との関係、サル汚物の処理などについて余程慎重な配慮を必要とする。そのため、サル施設、サル委員会は将来計画委員会などと終始連繫をとりつつ、この要求案のとりまとめに当たり、協議員会においてその具体案の説明を行なった。要求の骨子は、研究所正門を入れて直ぐ東側、現在テニスコート、屋外グループケージ、旧検疫舎プレハブなどが並んでいる一面に、総面積約2,600 m²の半地下式放飼場を設け、これを四区に仕切って夫々20~30頭(総数約120頭)の繁殖用母群を収容する。サルの種類は現在最も利用度の高いアカゲザル、ニホンザルとする。ここから毎年約60頭の仔ザルが生産される見通しであるが、これを育成舎に集めてはほぼ8才に至る迄育成し、実験に供する。育成舎の建設予定地は現在の共同利用宿泊棟西側の傾斜地である。このプランの実現について既に述べたように解決すべき幾つかの問題点があるが、力めて所内全般の意見を徴しつつ満足すべきものを完成したい。

今年度のサル施設運営について喜ぶべき他のひとつは、漸く運営費の増額実現(約230万円)を見たことである。このことについては、全国各地の動物実験施設からも年毎に強い要求が出されてきたのであるが、今年度遂に要求実現の運びとなったことは大いに喜ばしい。関係当局の理解と援助に対して感謝の意を表したい。

1) 教務職員